

山と博物館

第19巻 第8号

1974年8月25日

大町山岳博物館



夏山をゆく—白馬岳—

撮影 丸山 雅弘

かごの中の目

山岳博物館には今、ニッコウムササビが二匹います。一匹は私が博物館に来る前からいる先輩で、もう一匹は今年の五月に博物館へやって来ました。赤ちゃんムササビは最初スポイトでミルクを飲んでいましたが、今ではずいぶん大きくなって、リンゴ、クルミ、ニホシ、ペレットなどを食べています。

ムササビは夜行性の動物なので、私たちの生活とは逆で、昼間は眠っており、夜活動します。でも、かごの中のムササビは、人間の荒っぽい足音や声によって、時々睡眠を妨害されてしまいます。

ある日の夕方、餌を与えに行くと、ポツカリと眼をさまし、「おはよう。今、夢を見ていたんだけど」とうれしそうに話し始めました。「ぼくは、お父さんとお母さんと、おにいちちゃんと一緒に森の中に住んでいたんだ。昼間は樹の穴の中で眠り、夜になると広々とした木々の間を滑空して、木の実や芽や皮を食べるんだよ。あまり良い木の実もないけれど、十分運動するからおなかやすいておいしんだ。」

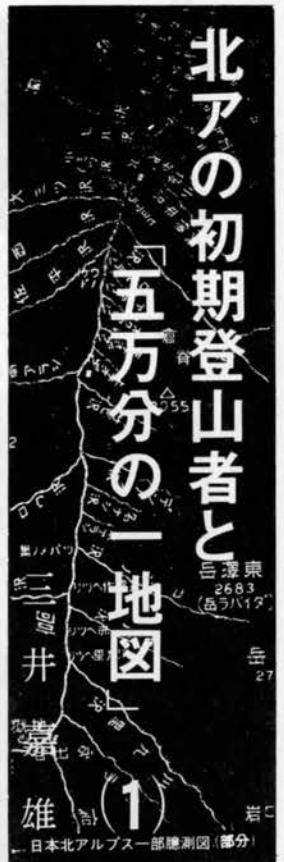
この話を聞いて、チョット変だと思いました。だって、このムササビは博物館に来た時はミルクを飲んでたし、滑空だってできそうもないくらい小さかったのですから。しかし幼児期の体験というのは、深くその意識下に潜在しているとも言われていますので、きっとそれが夢となってあらわれたのだでしょう。かごが小さすぎるのは前から気になってはいましたが、栄養のバランスを考えた餌を与えられ、外敵の心配もないかごの生活しか知らないと思っていたムササビが、こんな夢を見ているとは少しも知りませんでした。

それからというもの、ムササビに餌をやりに行くたびに、何だか申し訳ないような悲しい気持ちになってしまいます。ところが昨日、餌をやり終え、帰ろうとした時フツと合ったムササビの目にびっくりしました。その目は私がそうした気持でムササビを見ているのと同じ目でした。

(降旗英子)

北アの初期登山者と

五万分の一地図



1 五万分の一地図 以前

陸地測量部が北アルプス周辺の最初の五万分の一地図を刊行したのは、大正二年の夏のことである。三角点測量によって、ほとんど正確な地形や登山路が記されたことは、当時の登山者にとつてたいへんな福音であり、これによって登山が大衆化されていく一つの大きな要因にもなったのである。

日本アルプスに氷河地形の存在を証明し、立山の山崎カールの発見者である山崎直方博士は、大正二年の鳥帽子岳から鷲羽岳への縦走に、できたばかりの五万分の一地図を利用したという記録がある。

それ以前には、地図といえは「輯製二十万図」や「予察四十万図」があったにすぎない。(輯製二十万図の一地図)

陸地測量部沿革誌によると、輯製二十万図の一の地図を発行するようになったのは明治十七年のことで、伊能忠敬の地図を基礎にして、各府県調製の地図を参酌校訂して全国地図を作り、一般の便に供するのが目的であったとのことである。

本暮理太郎は、上野で開かれた内国博覧会でこの地図を見つけてすっかり感心し、登山にも使っていたが、「しかるに詳細である」と信じていた地図も、平地はとも角、一步山に入ると一向役に立たぬのみか、迂闊にこれを信用すると反ってひどい目に遭うので非常に驚いた。」(『思い出す儘に』)と感想を述べている。

また小島鳥水によれば、「実測以前の机上調査図の二十万図の一図」と記されているし、武田久吉も「明治の山旅」の中で、「輯

製二十万という捏造地図しかない時代のこと」とときめつけたあと、「明治時代には地図上に明記してある山岳であつても、その麓まで行つてみない限り、果して登れるかどうかは予期できない状態であつたのである。」と続けている。

伊能図は現在でも海岸線などは高く評価されているが、その図面を基にして、山岳地帯などは正確な測量もなされないままに、この地図になったのである。「お化け地図」といわれる例の輯製二十万図の一の……地図については深田久弥は、「わが国の山岳の先覚者たちは皆あのお化け地図を持って、見知らぬ山を歩き回られたのかと思うと、なんだか胸がゾクゾクするようなうれしい感じがしてくるのであつた。」(『わが山々』)というように、あきれるよりも、感じ入っている様子であつた。もとより、登山用に作られたものではないが、この地図しか頼るところのなかつた、当時の登山者の苦勞がしのばれるのである。(予察四十万図の一地図)

農商務省地質調査所が明治二十年から調査を開始し、同二十三年に刊行された地図である。北アルプス方面は神足勝記と中村照静の二人が測量をしたというところであるが、大震災と戦災で当時の記録は残つておらず、その測量の模様や案内者などは不明である。

この地図の特色は、主要地に三角点を設けて、いわゆる三角測量を本格的に行なつた、はじめての地図なのである。

小島鳥水の「日本アルプス」には、「そこには三角測量標が立つてゐる、近づいて見ると、参謀本部ではなくつて、農商務省の

あつた。」と雲の平が説明されている。農商務省の三角点の設置場所は、いま手もとで判明しているのは祖父ヶ岳(爺ヶ岳)、鳴沢岳、ザラ峠、奥大高山(萬岳)などであるが、穂高の湖沢岳に現存する三角点は、農商務省のものを陸地測量部が転用したものである。

四十万図の一の縮尺というところ、槍ヶ岳と鷲羽岳の間が図上で一、五センチくらいとなつて、山脈の様子を掌握するのが精いっぱいであつたし、記入されている山名も、現在の山頂の数からすれば、かなり大ざっぱなものであつた。それに加えてこの地図にも地形上の間違ひがあり、穂高の近辺では湖沢の谷が全くなく、穂高山(穂高岳)はぐんと槍ヶ岳に近づき、反面では硫黄岳(現在の焼岳)から約八キロ北で穂高山の手前にもう一度焼山の記入があつたりしている。標高も大天井岳、常念岳などは槍ヶ岳より高いことになつているのである。

予察四十万図の一が刊行された明治二十三年は、陸地測量部が、全国を網羅する基本図の縮尺を五万分の一とすることに決定した年でもある。そして、五万図の測量が開始されたのは、それから二年後の二十五年のことである。明治二十三年刊の「農商務省地質局事



予察四十万図の一地図 (部分)

業十年間報告」の中で、将来の目的として、「他日陸軍参謀本部ノ地形測量進歩スルノ日ニ至ラハ特ニ本課ノ実測ヲ要セス直ニ参謀本部ノ刊行図ヲ用ヒ」となつてゐる。

小島鳥水が、明治三十五年にはじめて横浜のウエストン邸を訪れたとき、応接間の壁に農商務省の日本大地図が掛けてあつたということが、恐らくこの四十万図の一の地図だろうと推定される。

なお明治四十年に発行の志村鳥嶺、前田曙山共著の「やま」には、付録として「日本高山地図」がついてゐる。農商務省の、この四十万図の一の地図をほとんどそのまま転載したものである。

(日本北アルプス一部臆測図)
日本山岳会が発行する「山岳」第六年第一号(明治四十四年)の付録に附いた地図で、山岳会員の村清太郎が作図してゐる。

後立山を大正二年に縦走した百瀬慎太郎が「私が持つてゐる地図はただ日本山岳会製の日本北アルプス一部臆測図一枚あるのみ。」(『山を想へば』)とあるように、当時の山岳会員だけが手に入つた地図である。

縮尺十万分の一で、山岳名、沢などが克明に記入されている。地形は、例の二十万図の一を基にしたらしいが、標高は後に発行される五万図の一に合致している。この点については小島鳥水の文の中に、「標高は高頭仁兵衛が日本山岳会のために陸地測量部から写しとつてきた。」(『日本北アルプス風景論』)という記述があるから、多分それを使ったものである。鳥水もこの地図には満足したようである。「今日までに獲られた北アルプス最新の地理的知識は、同図に依つて窺はれやう。」(『山岳地理研究』)と述べてゐる。

二年後に発行された五万図の一の地図では蓮華岳(三俣蓮華岳)と鷲羽岳の山名が間違つてゐたが、この臆測図ではおもしろいことに、現在の名称のとおり正しく記されてゐるのである。



白馬の絶頂 明治四十年八月写、四十
年以後の写真には三角点はありません。

(撮影及び写真の説明 志村島嶼氏、
同氏の好意により大町山岳博物館に寄贈されたもの)

いずれにしても、明治も終ろうとしているこの時期になって、やっと登山者が信頼できる地図ができて、それを追うように五万分之一ができてきたのである。

2. 五万分之一の測量

五万分之一の地図は三角測量であるため、位置、配置、見通しなどが考慮されて、山頂にも一等から三等までの三角点が選定されて埋設された。

一等三角点は、北アルプスでは乗鞍岳、前穂高岳、前常念岳、白馬岳、立山などにあつて、明治二十七年から二十九年にかけて三角点が設置され、測量は明治三十年から三十三年に行なわれた。

つづいて二等三角点が焼岳、槍ヶ岳、笠ヶ岳、薬師岳、野口五郎岳、燕岳、蓮華岳、鹿島槍ヶ岳、唐松岳、朝日岳などの頂に明治三十五年から三十七年の間に設置されている。この二等三角点の場合は、三角点が設置されたとすぐに測量をしたらしく、焼岳などは三

角点設置の日に、観測も行なわれている。三等三角点は明治三十九年から四十年にかけて設置され、それぞれ二ヶ月位の後に測量がなされている。

ここでちょっと気がつくことは、一等の前穂高岳と前常念岳である。そこに選定された理由については、公式文書が残っていないので正確なことはわからないが、前穂高岳については、現在なら日本第三位の標高をもつ奥穂高岳に決るのが妥当なところであろうが、当時は前穂高の方が高いと考えられていたもので、そこに落ちついたものと思う。これについては、ウエストンの文章の中にも、前穂高よりも奥穂高の方が高いのではないかと疑問をもっているところがあるし、穂高―槍ヶ岳の間の正雄も指摘している。奥穂高の山頂には今も三角点はなく、その後の測量のうちに標高点が設置されている。

前常念岳の場合は、常念岳の頂上がほんの少し南に折れ出ているために、平地からの見

通しの点で前常念岳に決つたのではないかと考えられる。明治三十九年に小島鳥水は、日本の登山者としてはじめて常念に登つたのであるが、「前常念といえるは、遙かに離れて松本平を俯瞰すべく、一支を派したるものなるが、低きこと奥常念の六合目程度ならむ。一等三角測量標はここに立てり」(「常念岳登頂」と記している)。

前穂高も前常念も三角点の選定は館澤彦が行なつていて、彼はそれぞ明治二十九年と二十六年に頂上に登つていて、館澤彦については、いろいろの文章には測量官となつていて、彼は選定者で観測はしていない。北アルプスの中で館澤彦が選定した三角点は、そのほかには乗鞍岳、白馬岳、立山である。ちなみに前穂高岳(三角点名は穂高岳)の測量官は三輪呂輔、前常念岳(三角点名は常念岳)は池田文友、白馬岳は関大之である。

ところで当時の測量官は、山頂を駆けもちで広範囲をかなり忙し行動したらしく、例えば佐々木戸次郎の場合には明治三十九年八月二十六日に黒部五郎岳、二十八日に三俣蓮華岳、九月六日には鷲羽岳、十四日には水晶岳、十月六日に飯鬼岳と観測を続けている。これは重い観測器材をもつての移動、宿泊小屋づくり、天候待ちなどを考慮すると、たいへんな強行軍である。しかも測量は山頂からだけでなく、それ以外の三角点からも一帯を観測したのである。

三角点の柱石は、一等三角点の場合、長さが八十二センチもある花崗岩で作られていてこれを山頂まで運び上げることはかなりな重労働であるわけだ。約六十センチが地中に埋められ、その下には盤石という基点が埋められていて、盤石にも十印の刻印がつけられている。槍ヶ岳の三角点のように地中の盤石まで抜きとられ、山頂にころがっている例(昭和四十八年現在)も見うけられるのである。この槍ヶ岳の三角点の柱石は、小林喜作が上高地から一人でかつぎ上げたものといわれている。

いる。

北アルプスの山頂で、三角点の設置が一番早かつたのは白馬岳で、明治二十七年十月のことである。立山の三角点は明治二十九年に埋設されたが、同四十年に柴崎芳太郎が改埋している。この時は岩石のために規定の埋設ができず、セメントを使って固定している。柴崎は、その少し前に剣岳から観測したという人である。

測量器具には三角法により経緯度を使用し、アリダードによって平板測量であった。道さえない尾根や谷を駆けめぐる測量官たちの努力を考えれば、縦走路を歩く今の登山者のアルパイトからすれば比すべきものもないであろう。大正六年には冠松次郎が早尾尾根を初登はんして、剣岳から槍ヶ岳へ縦走をしているが、早尾尾根ではキララ谷から一九二〇メートルの三角点までは、測量隊が森林を切り開いた道がつけてあつたのでそれを登り、それから先は苦労して登はんしている。また百瀬慎太郎も鳴沢岳のあたりで、国境測量の時の切りあけ道を通つていく。

唐松岳の測量の記録には、「測点附近約四五丁峻峻ナリ、在来道ナキ所造標ノ際多少伐採セシモ交通甚ダ不便ナリ」と記されている。それから現在には喜作新道があるが、槍ヶ岳の東鎌尾根については、辻村伊助の『神河内』の中に、「陸地測量部で西岳に三角標を建設する時、牧の小林喜作、永田小十郎の二人とも比の尾根を通つたことがある。」と記されている。道のない東鎌尾根の困難な通過をものがたっている。ついでながら大天井岳の測量記録には、案内者有明村牧、長田小十郎と、これにだけは案内者の氏名まで記載されている。

(「山と溪谷」通信員)

北安曇地方の食用キノコ (予報) (一)

長 沢 武

深まり行く秋の一日を、大自然の中にキノコを探す「キノコ狩り」はまことに楽しい。陽だまりの紅葉の下に、思い思いの姿型をして、くる人々を待っている森の「精」達はほんとうに愛らしい。

美しい日本の自然を代表するこのキノコ達は、いったいどのくらい種類があるのだろうか。残念ながら、日本のキノコ(菌類)研究は、外国にくらべて随分遅れているようで、現在約一、五〇〇種が知られているが、これは実際の半分くらいだという。

ところで、キノコと言えば「キノコ狩り」(食用になるキノコ)そして、何時も問題になるのは毒キノコと食中毒である。



ハルシメジ

日本のキノコの中、食用になるのは約三〇〇種、一方毒キノコは約三〇〇種で、この中、生命にかわるような猛毒種は七種類である。北安曇地方もキノコ狩りが盛んであるが、一般に食用としているキノコは約四〇〇種で他地方に比べてまことに少ないかぎりである。

長野県に産する食用キノコは約二〇〇種、北安曇地方でも一五〇種は下らないと思われるので、今回は北安曇地方に産するキノコの中、食用となる主なキノコ約一〇〇種を選び、簡単に説明をしたい。

1. 地上に発生するキノコ

(一)、庭、畑、路傍のキノコ

ハタケシメジ 秋、人家の付近、特にキウリやササゲなどの畦に群生する。ホンシメジと色、大きさ、株立ちの状態などほとんど変らないくらい似ている。人家近くに発生するのであまり利用されていないが、味もよく立派な食菌である。

ハタシメジ 初夏から秋にかけて、人家近くのナスやキウリ畑やモモ、ウメなどの果樹の下に群生または散生する。形態はムラサキシメジによく似ているが、少し小型で、傘の色も淡く、淡紫色の肉色をし、乾くとほとんど白くなる。また同じく畑などに出、色も似ているが型が小さくヒダがずつと荒いコムラサキシメジ(食)がある。

ハルシメジ 春から秋、主として春に、リンゴ、ナシ、モモ、ウメなどの果樹の下や山地に群生または散生する。ホンシメジに似ているが、ヒダはや、疎で、初めは白色であるが、やがて肉色となるので、ウラボシホテイ

シメジ(食)や毒菌のクサウラボシタケにも似ているので、秋に発生するものには注意が必要。

ササクレヒトヨタケ

春から秋にかけて人家近くの空地、畑路傍や草原などに群生または散生する大型のヒトヨタケで、はじめ円筒型、のち半開きとなる。傘の表面は白色の地に淡褐色のササクレを生じ、成長すると傘の



ササクレヒトヨタケ

端から黒インク状に液化してとける。食用には、若い弾力のある頃だけ。見た目より味の良いキノコ。

ネナガヒトヨタケ 前種と同じヒトヨタケの仲間、春から秋にかけて農家の堆肥や牛馬糞の上に多発するので、マグノタケなどと呼ばれているお馴染みのキノコ。型や液化する状態は前種によく似ている。食用にするのも肉の充実した幼菌のうちだけ。

キツネノチャブクロ ミミツブレ、ケムダシキノコなどと子供の頃から親しまれているキノコ。春から秋、明るく開けた地面に群生。同じ仲間、表面平滑で、細かいいぼ状のつぼみがないものはタヌキノチャブクロで、どちらも食べられるのはギボウシウシのような頭部を、指先でちぎってみて白色で弾力のある若いものだけ。肉が少しでも灰色化しているものは、食期を過ぎたものである。やがて頭頂に小孔があき、つぶすとこ、から煙状に胞子がでるのが特徴。似た種にツチグリ(ツチガキ)があるがこれは食べない。

以上の他後述のアミガサタケの仲間も人家近くの雑木林の周囲や、庭先などに発生する。

(二)、草原のキノコ

ムラサキシメジ 秋も遅い頃、広葉樹林やその外縁部の原野、茅などの中に一列に群生する。一般に馴染みあるキノコで、はじめ美しい紫色をしているが、次第に緑色してくる。煮るとかすかな土の香りが特徴。

ヤチヒコヒダタケ 秋、稲の穂が熟しかける頃から稲刈りの頃、ミズゴケやスゲの多い湿原内や湿田の畦に散生し、アワラキノコ、ヤチモトアンなど土地の人から呼ばれている。モトアシといわれる通り、ナラタケと似ているが、水分を多く含み、こわれ易いキノコである。

以上の他、前述のキツネノチャブクロや後述のオオハラタケも草原によく発生するキノコである。

(白馬村役場・大町山岳博物館調査員)

山と博物館 第19巻第8号

発行所 長野県大町市TEL0261-8211

印刷所 大町市下仲町 大町山岳博物館

定価 年額四〇〇円(送料別)(切手不可)

郵便振替口座番号(長野一三、二九三)